

「長良川中流域における岐阜の文化的景観」全覧図〔夜〕

人の営みと風土により形づくられてきた重要文化的景観は、非常に広いエリアを対象とするため、その価値の全体像を視覚的に理解しにくいといえます。そこで、景観研究室では、調査に関わってきた各文化的景観を対象に、エリア全体を一つの鳥瞰図^{ちようかんず}として表現する「文化的景観全覧図」の作成を進めています。

今回ご紹介するのは、平成26年3月18日に国の重要文化的景観に選定された「長良川中流域における岐阜の文化的景観」(331.9ha)の全覧図〔夜〕です。この図の中には、その特徴である、流通・往来の主軸として機能した清流長良川、6名の鶴匠が住む右岸の鶴飼屋地区、左岸に形成された問屋町としての岐阜町、町場から強く意識される金華山と模擬天守、といった様々な物語が詰め込まれています。

そして、初めての試みとして、昼と夜の2パターンの全覧図を作成しました。夜の全覧図には、岐阜らしさを語るうえで欠かせない鶴飼の様子を描いています。鶴匠の「ホウホウ」という掛け声や、篝火が「パチパチ」と燃える音が、この図からも聞こえてくるのでしょうか。

(文化遺産部 恵谷 浩子)

